

4 モード・クレア

教会から出ると尊大な足取りで

新婚のふたりを追う女性^{ひと}がいた

花嫁は村の乙女という風情

モード・クレアは女王のようだった。

「トマス」と花嫁の母が

5

泣きそうな笑顔で語りかけた

「長年連れ添ったわたしたちのように

ネルとお前もお互いに 真心を尽くしておくれ。」

「三〇年前のこと お前の父にも

同じことがあったのですよ

10

でもお前もネルも あの頃の私たちよりも

もっと蒼ざめているのね。」

ふたりはたしかに蒼ざめていた—花嫁は内心の葛藤のゆえに

ネルは自尊心ゆえに。

花嫁はやはり蒼ざめたモード・クレアを

15

じっと見つめて そして花嫁に口づけをした

「受けとってくださいな、あなたへの

贈りものを」モード・クレアは口をひらいた

「新居の炉辺を 食卓を 新婚の寝床を

祝福したくて 持ってきたの

20

「これはあなたとわたしが身に着けていた

おそろいの金の首飾りよ

あの日谷間でふたり 足首まで浅瀬に入り

百合をさがして歩いたわ

「これは芽吹いたばかりの枝から

25

一緒に摘んだ葉よ、色褪せているけれど。

そう 百合の葉叢^{はむら}に足を踏み入れた日—

あの百合も 蕾がふくらむころね」

当てこすりに言いかえす言葉が見つからず
彼はその場によろめいた 30
「きみ」ようやく声を絞り出し「モード・クレア」と言った—
「モード・クレア嬢」—そして顔を覆った

彼女はネルの方に向きなおり「レディ・ネル、
あなたにも贈りものよ
果実にたとえれば色艶は失せて 35
花にたとえれば干からびているけれど。

それは移り気な心 しみったれた愛情よ
わたしのものだったけどあなたにくれてやる
受けとるもやめるも好きにすればいい
わたしはもう足を洗ったわ」 40

「それならわたしいただくわ」ネルは言った、「あなたが捨てたものを。
身に着けるわ あなたが足蹴あしげにしたものを。
どんなことがあっても こうして一緒になったのだから
わたし 彼を愛しているんですもの モード・クレア

「たしかにあなたはわたしより 頭ひとつ背が高く 45
賢くてはるかに美しい。それでもわたしは
ずっと彼を愛して きっと一番になってみせる
わたしが彼の最愛のひとになってみせるわ モード・クレア。」

(滝口智子訳)